重要文化財
福井県林・藤島遺跡出土品について

遺跡の概要

林・藤島遺跡は、九頭竜川中流域左岸、扇状地の自然堤防上にある、縄文時代晩期、弥生時代後期～古墳時代、鎌倉時代の複合遺跡です。主な遺構に、弥生時代後期の集落に伴う玉作り工房や、古墳時代後期の水田跡などがあります。

弥生時代後期の集落跡では竪穴住居・平地住居、掘立柱建物、土坑、溝が見つかりました。集落にある玉作り工房とその周辺からは、玉の材料、管玉・勾玉の完成品や未成品、砥石とともに、径1㎜前後の錐（きり）や錐より太く長い鏨（たがね）など、玉を加工する鉄製の工具が大量に出土しました。鏨は管玉を作る時に原石を割り角柱状に加工するのに使ったと思われます。錐は先端が細く、管玉に孔をあける際に使用されました。これらの遺物は管玉生産の製作過程を明確に辿れるものであり、弥生時代後期の北陸で、玉作りの工具が石製工具から鉄製工具に移行したことを示す貴重な資料です。これらのほかにも、弥生時代後期の注目できる遺物として、ガラス製小玉や管玉、土製勾玉などが出土しています。

弥生時代の遺跡で、玉の完成品・未成品とその製作に使用した鉄製工具が大量に出土した事例は少なく、工具も鉄器の使用を想定していたに過ぎませんでしたが、この遺跡の調査により、弥生時代後期の玉生産技術が明らかになりました。出土した遺物は、国の重要文化財に指定され、現在、保存修理が行われています。

竪穴住居検出状況

玉作り材料出土状況

出土遺物

土器や石器などがありますが、なかでも玉作り関連遺物が注目できます。

管玉の製作過程

管玉は、材料である原石を打ち欠く荒割り段階、その後の形割り段階、研磨段階、未成品段階、穿孔段階を経て、完製品となります。この過程のなかで、鉄製の工具を用いるのが林・藤島遺跡の玉作りの特徴です。これが弥生時代中期の玉作りとの大きな違いです。これは当時の地域間交流の増加と関連したものと思われます。

勾玉

ガラス小玉

玉類は管玉の完成品が 200 点程である一方、勾玉は未成品を含めても 50 点程と少ないことが分かっています。勾玉の中には珍しい土製のものもあります。このほかにもガラス製の小玉がみられます。ガラス生産は大陸から伝わった技術で、その製品は貴重なものです。

鉄製の錐

錐による穿孔（想定）

玉作りの鉄製工具には、原石を角柱状にする際に用いた鑿、穿孔の際に用いた錐、目打ちやタガネに用いた棒状製品などがあります。錐は径1㎜前後のもので、先端が尖っています。写真にみられるように穿孔は管玉の両側から行われるのが主流であったようです。

砥石

玉作りの道具に砥石があります。表面には玉を砥いだ時にできた溝がみられます。